

議案第48号

倉敷市指定重要文化財の諮問について

このことについて、次のとおり議決を求める。

令和4年12月1日提出

倉敷市教育委員会

教育長 井 上 正 義

指定を諮問する文化財

1 名 称 絹本著色仏涅槃図（受法寺）

2 種 類 絵画

3 員 数 1 幅

4 所 在 の 場 所 倉敷市山地268

5 所有者の氏名 宗教法人 受法寺 代表役員 垣本良明

及び住所 倉敷市山地268

6 内 容 絹本著色

寸法 本紙 縦197.0cm 横146.0cm

7 制作の年代 室町時代中期

又は時代

8 指定の理由 仏涅槃図は臨終の釈迦を囲んで、仏弟子など多くの人びとや動物たちが嘆き悲しんでいる情景を描いたものである。

本作品は中国宋代の絵画の影響を受けて室町時代中期に製作されたと考えられ、人物や自然の表現には伸びやかで親しみやすい時代の嗜好が良く反映されている。また、裏面には過去の修理に関する墨書が貼り付けられ、中世に山岳仏教が盛んであった日差山一帯の様子を垣間見ることができる。

市内に残る数少ない中世後期の優品であり、当時を知る数少ない墨書が残る貴重な資料であることから、倉敷市の重要文化財に指定して長く保存していくべき絵画であると考えます。

調査日	2021 / 11 / 30	調査者	中田・上菌・ 倉敷市教育委員会（平田・藤原）
画像データ 別添			

作品名	絹本着色 仏涅槃図	員数	1 幅
所有者 (無住) 受法寺	〒701-0104 倉敷市山地 2 6 8		
所蔵者連絡先 (兼務) 宗蓮寺	〒701-1346 岡山県岡山市北区津寺 4 8 5	Tel	086-287-2184
保管場所および保管責任者 受法寺（受法寺檀家ならびに宗蓮寺）			

作者	不詳		
時代・年代	室町時代	16 世紀初頭	
素材・技法	絹本・着色		
太巻	無	箱	木箱 1
全縦（含む表具） 295.0 cm	全横（表具含む） 177.8 cm（軸先含む 189.7 cm）		
本紙縦 197.0 cm	本紙横 146.0 cm		
表具・付属品 備考 軸先 約 6 cm 箱は日久（栄丈院日久、明治 14 年 8 月 5 日遷化）の代に再調したもの（マツ材か）。			
図様の特徴			
右手を顔の前に置いて蓮華を枕に横臥する釈迦を中心に、菩薩・諸天・仏弟子・在家が参集して釈迦との別れを惜しむ様子が描かれる。左上には天界からこの場に駆けつける母摩耶夫人、画面の下方には獅子・白象を初めとする諸々の獣や鳥、虫などの生き物が参集している。上方中央より向かってやや右よりに月を配し、宝台を取り巻く 8 本の沙羅双樹は、左 4 本が青葉、右 4 本が枯葉を呈する。釈迦の足元には嘆く老女（毘舍離城の貧女）が描かれる。宝台の手前で気絶し			

横たわる阿難は色白の美しい少年に描かれている。

釈迦の横たわる宝台（寝台）の足側の側面を見せる第一形式（※）が平安時代以前に主流であったのに対し、頭側の側面（向かって左側面）を見せる第二形式は鎌倉時代以降に主流になった。本図は第二形式にあたる。涅槃図は時代が下るにつれ会衆や鳥獣の数が増え、釈迦の周囲にひしめくように描かれるようになり、やがて画中に願主の姿を現すような作品も現れるなど独自の図様が生まれたりして、制作され続けた。涅槃図は全ての仏教宗派にとって重要な法会であったから、実にさまざまな構図やモチーフの組み合わせがある。

本図の場合は、会衆や鳥獣の数は比較的少なく、中央の釈迦の姿も会衆と同じ大きさに描かれていて、嘆きの表情も誇張が抑えられ、穏やかな入滅の場面となっている。この点は古様である。

画絹は縦に三巾に綴じたもので、やや粗めのものを使用。本来はより濃い色彩であったと思われるが、修理の際に裏彩色を伴っていた部分については多くの顔料が失われたと見られ、今日では胡粉彩色の白色部分や金泥で仕上げた表の彩色部分が目立つようになっている。また中央上部の一角（方形）のみに補彩が残りやや濃い色合いとなっているが、補彩をここだけにとどめた理由については不明。

（※）1978年『涅槃図の名作』京都国立博物館・1988年『日本の美術9 涅槃図』至文堂の著者である中野玄三が分類）

所見

全体に彩色が薄くなって鮮やかさこそないが、かえって人物の表情や輪郭の墨線はよく観察でき、後補部分の少ないことと相まって当初の画風を知ることができる。

画中に登場する会衆の表情は比較的穏やかでありながら、目元には泣きはらしたかのように赤みをさし、視線は乱れなく釈迦に向けられていて、人物描写は細やかである。また釈迦が周囲の人物と同じ大きさに描かれるのは古様である。衣皺の重なりや膨らみを濃淡で表し、人物の肉身にも陰影がつけられている点は、宋元画の影響を受けた作品に倣ったと見られる。

涅槃図は全ての仏教宗派が必要とする礼拝画であり、それゆえに多くの作品が制作されて、古画、宋元画などの様々な画風や、様々なモチーフ（動物の種類や会衆の構成など）が取り入れられて、どの時代にも多様な涅槃図が混在する。一般に13世紀頃から第二形式が主流となり、古いものは会衆鳥獣が少なく、釈迦は会衆人物と大差ない大きさに描かれるものが多いが、本図もこのような特徴を踏襲している。

平安時代以来、多くの作品が作られ続けてきた涅槃図については、図様や構図だけでの制作年代比定は困難で、むしろ画絹の質や寸法、人物の表情や姿勢、銘文などによるところが大きい。

（画絹）

絹目はやや粗いが、16世紀後半によく見られる紬糸で織ったような粗絹ではない。また鎌倉時代の作品に多い細い繊維の整った織糸とも言えない。総じて肖像画や仏画の中から同時代の記年作品を参考にすると15世紀中期から16世紀前半期の幅のなかで、制作年代を捉えることができる。縦に三巾に綴じて、その中央巾に釈迦が収まっている点は、本作がしっかりとした仏絵師（仏画工房）のもと制作されたであろうことを示唆している。

（表情）

誇張を抑えた表情で、会衆鳥獣すべてが静かに釈迦との別れを惜しんでいる風である。特に会衆の表情は豊かで、老若男女の個性を巧みに表現している。また遠方に見える大河の波濤や沙羅双樹の枯葉青葉の描き分けなど、写実味を加えながらのデフォルメが巧みである。この点は、例えば「金陵山古本縁起」（西大寺観音院所蔵、岡山県指定文化財、永正4年(1507)作）などにも見

られるところである。このような表現の嗜好から、制作年代は 1500 年前後と絞りたい。

(墨書銘)

表具裏には、安政 4 年 (1857) に修理した際の記録・施主・寄進者が書き上げられ、その下方には旧表具裏の切り取りを貼付している。記録には、旧表具裏は天文 22 年 (1553) に修理した際のものであると記し、貼付された旧表具裏には願文の一部と寄進者 76 件が書き上げられている。そこには「奥聖寺」(※1)「多門寺」「玉蔵寺」「浄土坊」「曼荼羅寺(※)」「満願坊」「井上寺」「養福寺」「松見寺」「成福坊」といった日差山中にあった寺坊の名とともに、在俗施主の名が列記されており、多数の施主により修理がなされたことがわかる。日差山は古代から山岳仏教が盛んで、「金山寺文書」「安養寺文書」といった中世文書中にも登場する一大修行地であった。多くの寺坊があったが、戦国時代ころから衰退し、江戸時代にはいって戸川氏によって日蓮宗改宗への圧力がかけられると、各寺坊は山を下りて周辺部に移転し名前を変えたり合併したりして村の寺院として存続した。本図は修理時期 (1553 年) 前後の日差山中を知る上で貴重な史料である。

またこれが修理時期とすれば本図の制作年代はさらに遡る。通常のように制作後 100 年以上たったか、あるいは戦乱の世であるから短期間で修復が必要となったかの判断はつかないが、15 世紀後半から 16 世紀初期を制作時期の範囲とするのが無難なところではないか。

上記のように面絹や表現の特徴、銘文などを総合的に判断すると、本作は室町時代中期 (15 世紀後半から 16 世紀初期) にかけての制作で、人物や自然の表現には伸びやかで親しみやすい時代の嗜好がよく反映された中世後期の優品といえる。涅槃図は、江戸時代以降になると各寺院が所蔵するほどになり伝世作品も多いのであるが、16 世紀以前に遡るものとなると少ない。さらに、日差山伝来の中世仏画は本図以外には確認されておらずこの点も重要である。

(※1 『備中誌』『都窪郡誌』では「興聖寺」と記されている。)

(※2 千手寺 (岡山市南区大内田) に伝わる涅槃図は曼荼羅寺が退転したのち在家にあったものを、宝暦年間に寄進されたと記録する。)

箱書・銘文

箱蓋表「備之中州都宇郡山地村妙信山什宝 箱再興之主十世 日久 (花押)」

表具裏下部貼付墨書 天文 22 年修理時の寄進者 76 件書き上げた、旧表具紙を切り取り貼付。76 件中、42 件目から以後は、文字の大きさ、字体、行間隔巾が変わる。中央の銘文二行については上部が切断されている。

中央 「・・・結縁為妙光逆修也 同百

・・・・結縁皆吉(?)殿逆修

表具裏 安政 4 年修理時の銘記および寄進者俗名、戒名、願文を多数列記

裏右 「天文廿二壬子二月 先表具再興 右箱二書附有之
于 安政四丁巳四月仏誕生日改再興」

裏中央「戒名入施入之面々

家紋繫榮子孫長久祈者也

再興主当山十世

榮丈院日久 (花押)」

裏左 「備中州都宇郡山地村妙信山受法寺永代什宝也」

<参考>

日差寺（平凡社 『日本歴史地名体系』）

ひさしじ

〔現〕倉敷市山地 日差

日差山山上にある。日差山と号し、現在は日蓮宗系単立寺院。本尊は毘沙門天王。治承四年（一一八〇）の金山観音寺縁起写（金山寺文書）によると、天平勝宝元年（七四九）金山寺（現岡山市）を創建した報恩大師が、のち日差山に登り一寺を建立し弟子の智久に譲ったという。智久は津坂の駅人の子で、在住後眼病に対する靈験で名声が出、時の帝の眼病を治癒し心浄大師を賜ったという。

応永三三年（一四二六）の吉備津神社の正殿遷宮次第によると、舞童を出していた五ヵ寺が無力となったために新たに五ヵ寺が付けられ、広谷寺に寄せられた寺に日差寺がある。土佐神社（現高知市）の内陣楽書に、元亀二年（一五七一）六月五日として日差寺の玉蔵寺・松本坊の僧と同行者七人の名がみえる。天正一〇年（一五八二）の羽柴秀吉の高松城（現岡山市）包囲の際、来援の小早川隆景の陣所となり、堂塔伽藍は破壊された。「備中誌」には往古の堂塔として二〇有余が記される。

関ヶ原の戦後、入封した戸川氏（庭瀬藩主）は領内寺院の日蓮宗への改宗を強制、改宗を嫌った当山は寛永一三年（一六三六）山上の寺を処々に移した（「備中誌」など）。例えば、満願坊は矢部村に移り日差山満願坊と号し、奥聖寺は上庄村に移り弘福山西方院と名乗り、曼陀羅坊は下庄村に、浄土坊は両部山無量院、見松坊は法輪山蓮光院と号し同村へ、大蔵坊は大内田村（現岡山市）へ、石橋坊は三手村（現同上）へ移った。また日蓮宗に改宗した西安寺→慈照院（倉敷市西岡）・受法寺（倉敷市山地）もまた山地村の里方に移っている。「備中誌」によると、山上の寺坊はことごとく滅亡し、本尊は山地村の内田氏が川へ流したとある。現在山上は往時をしのぶべくもないが、日蓮宗となった日差寺が建っている。本堂跡には報恩大師が巖に刻んだという多聞天王が残っている。この磨崖仏は当寺建立以前に山上に祀られていた日差神社がなくなるのを悲しんだ報恩大師が、その祭神の矢部山主命と矢部磨の本地仏多聞天王を刻んだと伝える。現在も地元の人々は毘沙門様と称して信仰している。

（同上 「山地村」の項）

「備中誌」に「涅槃像唐画にて尤奇也、明時代の物と見へし」とある。



絹本着色涅槃図 受法寺